

平成二十一年度  
入学式式辞

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。有明教育芸術短期大学へようこそ。皆さんのご入学に対して心から歓迎の意を表します。

保護者の皆様におかれましては、これまでの日々を振り返ると、一つの節目を迎えられたとの深い感慨をお持ちのことと拝察し、心からお慶び申し上げます。

また、ご来賓の皆様には、ご多忙にもかかわらずご列席を賜りましたことに、本学を代表し厚く御礼申し上げます。

これから4つのトピックスをお話します。

**第一のトピックスは「入学式の式辞は、いつの時代も自立を要求する」という話題です。**

私の先輩の方々が入学式の式辞の中で、概ね次のように語られるのを何度か拝聴しました。

「自分の存在の意味を学び、人格の絶対的価値や尊厳を認識し、一人の大人として自立することに挑戦なさい。大学は諸君を一人の人格者として、すなわち諸君を自分の頭でものを考え、自分の考えに則って行動する人間として対応します。したがって、細かい知識やスキルをあれこれ教えることは避けます。諸君が、自主独立の精神をもって真理の探求に専念することを期待します」とお話になりました。

またある先生は、戦争中に大学へ入学しましたが、入学のガイダンスで「今日から皆さん方を紳士として取り扱います」という話を伺った記憶を思い起こし、学長になられたとき式辞の中でそのエピソードを語ったという紹介記事を読んだことがありました。

第二次世界大戦を戦っていた時代は、公式の場で学生をジェントルマンとして処遇すると語ることはかなり危険な発言と受け止められる風潮が色濃い時代でした。このエピソードは、大学の中には、時代の色に染まらず、勇気をもって自説を貫く精神があったということを物語っています。

ここで言う紳士とは、どういう意味で使われたのでしょうか。この学長は次のように説明しています。紳士であるということは、これから何をやるのも自由ですが、皆さんのすべての行動に対してご自分で責任を負わなければならないということです。

したがって、人の意見に左右されるのではなく、一つ一つの行動を自分の頭で考えて選択できる自主・自立した大学生にならなければなりません、と説いているのです。

入学式の式辞に語られたもう一つの大学生論を紹介しましょう。いまから110年ほど前、京都大学の初代総長木下廣次先生が入学式で述べられた次の言葉は余りにも有名です。「本学学生にありては自重自敬を旨とし、自立独立を期せざるべからず。故に諸君は既に後見を脱したる者として吾人(ごじん)は諸君を遇するなり。」と入学生に語り掛けました。

「大学生となった皆さんは自立独立を目指しなさい。私たちは諸君が後見を脱したる者、すなわちこれまでのように諸君を助け、支えてきたもろもろのシステムや保護者を必要としない自立した青年として私たちは対応します。」という意味です。

これは日本の大学創設期においてほぼ共通した教育理念であったと思いますが、今日の大学におけるわれわれの教育理念も本質的には同じであります。しかしながら多様な価値観、多様な人間観が存在するようになった今日では、このままでは誤解されることを危惧し、ほとんどの方が補足の説明を加えています。私は昨日まではくどい説明を追加することを思いとどまっていたましたが、とうとう変節し、私も一言お話しすることになりました。

大学が諸君に期待する自由の意味・本質を誤解しないしてほしいからです。

自由とは5つの概念、言い換えれば5つのフレーズから出来ていると私は考えています。5つの概念とは、自己発見、他者発見、主張と責任、思いやりと妥協、そして最後はコミュニケーションです。

自由を愛する人は、自分を大切にし、自己研鑽に励み、自由な思考に基づいて行動し、社会や周囲の人々のリアクションを尊重することによって、責任ある態度を貫く人のことでもあります。私たちは、諸君が大学という新しい教育環境で、新しい行動様式を獲得し、大学生としての自負と気概を示してくださることを期待します。

## 第2のトピックス、「有明教育芸術短大のカリキュラム論」を少し語ります。

今日それぞれの夢をもって入学式にのぞまれた新入生の皆さん、あなたがたの夢を実現するための第一歩を果敢に踏み出してください。Dream Comes True! を確実にするために、明日から早速オリエンテーションが行われます。

この大学は決して大きな大学ではありません。この大学のキャンパスのどこで、どんな研究や教育が進められているかをしっかりと把握して、学科やコースの枠を超えて声を交わし、共に活動し、若者のやんちゃな知的関心を満足させ、新しい学問や学風に触れていただきたいと願っております。

あなた方の背後にはたくさんの方々が輩出するでしょうが、あなた方の前を歩く有明教育芸術短期大学生はいません。本学の伝統や学風を形成する最初のうねりは皆さんが作り出すのです。それは第1回生の宿命であり、権利であります。大いなる自負と責任を感じつつ、本学の歴史の先頭を歩んでく

ださい。

大きな大学にも小さな大学にも共通するひとつの特徴は、仲間が年齢も目的も異なる、さまざまな学生によって構成されていることです。教員免許や保育士資格の取得に挑戦する人、未体験の舞台芸術に挑戦する人、課外活動やボランティア活動にエネルギーをつぎ込む人。こうした多様な考え方や目的をもった学生が席を並べて学び、互いに切磋琢磨して学生生活を送って行くという点に、大学の一つの大きな特徴があります。

私たちは他領域の学問の魅力を味わってもらいたいという積極的な願いから、新しい学問を、異なる学科の学生と一緒に学ぶシステムを導入し、個性的な教育課程を編成しました。

その一つの例がアートセラピーという授業科目です。全学生がアートセラピーを学びます。保育とアートセラピー、芸術教養とアートセラピーという区分をしていません。同じ学問を違った関心や違った資質を持った学生が学びます。私たちは保育学や舞台芸術という学問領域に隣接する学問としてアートセラピーを捉えました。これは有明教育芸術短期大学がアートセラピーをカリキュラムに導入した理由であり、他に比類の無い画期的な教育理念であると言っていいでしょう。

また、たった2単位ですが、他学科の科目を必修として学ばなければならない制度も用意しました。小さな大学である利点は、私たちが理想とした試みを大胆に取り入れることができたことです。

この他にも、教育を活性化させるために、「ミニツツペーパー」というコミュニケーション・メソッドの導入、成績の5段階評価による評価精度を高める試み、「学習と表現の技法」という「学び方とプレゼンテーションの技法」について学ぶ演習科目の開設など、思い切り実験的で、個性的なカリキュラムを作りあげました。

本学の両学科の教育制度や教育課程についての説明が明日、明後日と行われますが、その特徴を十分に理解し、刺激的で有意義な学生生活をスタートしてください。

### **第3のトピックスは、「青年の特権、楽観的行動主義」についてです。**

私が教育者として、また演劇人として生きてきたプリンスプルは「まず行動せよ。そして考えよ。」というものです。

私たちが若かったころ、グループ活動が不得手でした。若者は昔も議論は好きでした。しかし一晩徹夜で議論しても、アクションまで発展させることは容易ではありませんでした。ロシアの演劇学者と演出家が、モスクワのレストランで夜を徹して議論し、20世紀演劇の殿堂と称されたモスクワ芸術座の礎を創設したエピソードは若い私たちの魂を切ないまでに揺すりました。本当の議論をしたい、本当の行動を起こしたい、と、どれほど渴望したことでしょう。

あるときバーナード・ショウのエッセイに出会いました。バーナード・ショーはイギリス近代演劇の確立者であり、戯曲『シーザーとクレオパトラ』などで世界的な劇作家となりました。1925年にノーベル文学賞を受賞しました。

ショウが記したたくさんの格言のなかに、私の心を動かした次の表現がありました。

「間違いを犯してばかりの人生は、何もしなかった人生よりも、あつぱれであるだけでなく、役に立つ。」

自分がなぜ行動を逡巡していたか、心の後ろに隠れていたものが見えたような気がしました。再び、ページをめくりました。そこには次のような表現がありました。

グラスに入っているワインを見て、「ああ、もう半分しか残っていない」と嘆くのが悲観主義者。「お、まだ半分も残っているじゃないか」と喜ぶのが楽観主義者である。

もちろん日本の宗教家やフランスの文学者の言葉の中にも、表現こそ違うものの、おなじ意味内容を示唆しているものがたくさんあります。しかし西洋カブレをしていた演劇青年の私にショウの言葉は新鮮そのものでした。

私の人生訓・行動規範である「まず行動せよ。そして考えよ。」はこうして生まれました。今年の正月、私は「まず行動せよ。そして考えよ。」という言葉をお皆さんにプレゼントしようと思いました。

私の人生訓も一度は改変の危機に遭遇したことがあります。10年ほど前、知人の紹介で、Y興行の二人の若いプロデューサーに会いました。彼らは上司の命令で、お笑いとお笑いと教育を結合する企画を探っていました。彼らは実によくしゃべり、よく歩き、よく食べました。3日ほど渋谷、新宿、上野、有楽町と歩き、思いつくままを議論しました。

かって議論したときは実現するとは夢にも思わなかった無責任なアイデアが現在では現実のものになっているのには驚きです。その一つはJRの駅のすぐそばにお笑いの拠点劇場を作るという案でした。私たちは自分たちで考えたこのプランを実現不可能と決めつけ、自分たちの知恵のお粗末さをあざ笑いました。

しかしいま新宿駅の駅ビルにY興行の劇場があり、渋谷駅から5分のところにも劇場がオープンしています。非常識とか不可能と決め付けたものの中にこそ、真実が宿っているという不条理を、このことを通して私は学びました。

若いプロデューサーたちを見ていると、彼らの哲学は、私の「まず行動せよ。そして考えよ。」とはまったく別のものでした。彼らは何かに追われているようでした。私と彼らの違いは、年齢の差から来るものだろうか、東京と大阪という文化の差から来るものだろうか、それともお笑いというパフォーマンスと演劇というパフォーマンスの差から来るものだろうか。

彼らに行動の違いがどこにあると思うか尋ねました。次のような答えが帰ってきました。Y 興行の哲学は「走りながら、考える。考えながら、走る」ことです。「まず行動せよ、そして考えよ」はのんびりし過ぎていませんか。すごく暇そうに感じられますと反撃されました。

私は行動することを青年たちに求めますが、やはりゆっくりでいいと思います。ただ考えすぎることで行動のエネルギーを失うことだけは避け、まず行動することを薦めます。

どうか2年間、または3年間の学習の場において、失敗を恐れることなく、いろいろなことに挑戦するアクションを起こしてください。

#### **最後、第4番目は、「92点の教員集団」というトピックスです。**

学生諸君が在学中に身につけるべきことは、専門の知識や技能だけではありません。社会に役立つ人間として卒業するために、優れた人格形成がなされねばなりません。自由と責任、すなわち自己発見、他者発見、主張・責任、思いやり・妥協、コミュニケーションという行動原理を身につける必要性はすでに述べた通りです。

そのためには、まずあなた自身の学習の技法を見つけ出すことです。

ソクラテスが「教育とは、炎を燃えあがらせることであり、入れ物を埋めることではない。」と言ったように、教室でひたすら知識を収集する受動的コレクターになることを教育は求めています。新しい考え方と遭遇し、心がうずき、やがてあなたの知的好奇心や創造力が飛翔するようあなたを支援するのが教育です。機が熟するのを待つこともときには重要です。

なぜ知的好奇心や創造力が飛翔するときを待ちなさいと、余裕のある言い方をしたのでしょうか。それは私が本学のティーチングスタッフに絶対的な信頼を置き、高い評価を与えているからです。

有明教育芸術短期大学のティーチングスタッフは私の自己採点では92点です。教授陣はそれぞれの専門分野の中心となる研究者・教育者や舞台芸術の各分野のリーディング・アーティストの方々によって構成されています。

また中堅や若手の教員も優れた資質を持ったスタッフです。努力し、研鑽すれば、遠からずして現在の教授陣の品格と学問の高みに迫り得る人材であると確信しています。

ゲーテが「私は教師ではなく、道を尋ねられた同行者に過ぎない」と言っています。これは私の大好きな教師論です。トップの教師たちが、まもなく諸君の同行者となって有明教育芸術短期大学の教育が動き出すでしょう。

学生諸君、教員の皆さん、職員のみなさん、私たちの大学の教育という旅はどんな賑わいを見せる旅となるでしょうか。

ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャとサンチョ・パンサのような旅もいい。松尾芭蕉と河合曾良のような旅もいい。マリアとトラップファミリーのような旅もいい。しかし私たちは私たち独自の旅を作ろうではありませんか。学生諸君、どうか遠慮せずに道を尋ねてください。そして教師を饒舌な同行者に変身させてください。

皆さんが、実り多い大学生活を送られることを期待して、入学をお祝いする言葉といたします。